第五百廿四號目次

◎社　說

道德の新原理……………有　美

◎隨　感

愛犬「黑」の墓前に哭す………如　雲
寂寥の夜半…………………………

◎女　學

洋行途上の感……………康　同　璧
料理道……………………生　間　正　起

◎雜　錄

舍監の四ヶ月(其四)……………有　美
明治初年の志士靑年……………大　隈　伯
結婚せざるべきや………………金子從下庵
越路だより…………………茉
ショウペンハウエル自殺論　‥有　美　譯
新文……………………………

◎時　事

斯翁逝く◎紅葉山人◎觀劇と學生◎ワグチルと
近世思想界◎藝術的墮落………………

◎次號　明治卅七年一月十日　發行◎

◎一冊金拾錢

海老名彈正先生著(最新版十二月五日發行)

菊版洋裝クロース上製價六十錢稅十錢
並製價四十五錢稅八錢

基督の大訓註釋

基督教に關する書類は坊間其數に乏しからずといへども近代の研究と深邃なる實驗とに基きて成れる註釋書に至りては一として見るべきものなし、斯教の大家海老名先生玆に見る處あり新約聖書中の眼目たる山上の垂訓を解釋し加ふるに論評を以てす眞に是れ未曾有の寶著にして江湖の要求亦始めて本書によりて滿たさるゝを得べきなり。乞ふ幸に愛讀の榮を給へ。

發行所　東京本鄕區四丁目五番地　文明堂

書叢學文英　第一編

GOLDEN TOUCH

BY NATHANIEL HAWTHORNE

高等師範學校講師　金澤久先生
國民英學會講師　奈倉次郞先生　共編

全部拾貳編●每編讀切●定價拾錢
石版刷口繪挿入●菊半切判●郵稅不要

本叢書は教科以外に英語を習得せしむるを以て目的とす程度は讀本三四なり

發行所　東京神田裏神保町一　三省堂

感與淸らに

新刊 宗教と自然美

宗教と自然美趣味津々たり

定價金十錢　郵稅金四錢

神田淡路町一の一　使命社

[illegible]

は人體改良家庭圓滿を希ふ撰者必讀の良書也撰婚の秘訣は血統より先づ其の品行を糺すに在り

價卅錢郵稅四錢

東京芝愛宕町二丁目十四番地　尙綱堂

猛志と成功

米國成功主義マーデン著
日本成功雜誌社譯

前途海の如き靑年諸君之を讀まば大志期せずして成るべし。しかも定價は僅に廿錢郵稅は四錢のみ。

發行所　東京本鄕弓町二丁目八番地　成功雜誌社

武田式學資出納通知箋

定價卅五錢　郵稅四錢

前山口縣知事武田千代三郞氏の意匠になるものにして學資の出納を通知するに端書を用ふるを得せしめ之に伴ふに和漢洋の訓戒詩歌格言を以てし靑柳靑美氏の輯むるところにかゝる。

發行所　東京市神田美土代町二丁目　自由英學出版部

大賣捌

東京　東京堂
西京　勉强堂
大阪　文潤堂

明治三十六年十二月廿日印刷
明治三十六年十二月廿日發行

發行兼編輯人　靑柳猛
印刷人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（特電番町千一番）
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍（新橋電話十八番）

女學雜誌
第五百貳拾四號
明治三十六年十二月廿日發兌

社説

道徳の新原理

人間道徳の最上理想は、この生物躰を化して、鑛物たらしむるにあり。否な寧ろ、自殺は道徳の最上理想たるなり。

然れども、道徳は必ずしも人間の依りて以て立つべき道に非ず。詳しく言へば、道徳と人道とは、全然相異るものにして、其懸隔たゞに雲泥のみに非るなり。ニーツエの如き道徳に激烈なる難者の出づる所因は、其智慮淺薄にして、未だ道徳と人道との區別に思ひ到らざるによる。もし、道徳にして人道と合一し、道徳即ち是れ人道なりせば、誰か道徳を排斥し之を攻撃することなくして止むを得んや。されば、道徳は是れ人道なるを信じて、しかも尚ほ道徳の讃すべきをいふものあらば、これ等の輩や痴者に非ずんば、コンヴエンショナリズムの迷徒なり。道徳の決して人道に非ること、之を知る必ずしも難からず。

道徳は教へて曰ふ『身を殺して仁を爲せ』と。又曰ふ『人その友の爲に命を棄つ、之より大なる愛は無し』と。又曰ふ『武士は食はずに高楊枝』と。又曰ふ『朝に道を聽いて夕に死すとも可なり』と。これ等の教にして、若し悉く是れ人間の守り履むべき道ならんか、誠にその人間を賊するものたるや明かなり。獨りニーツエを待ちて後知らるべきに非ず。もし、人間の總べてが皆な古の聖人聖者の言を受け、身を殺して仁を爲すに急ならんか、其歸するところ果して如何。是れ人類の絶滅なり。又、天下を擧げて所謂士人の面目なるものを重んじ、傲然として高楊枝に悦ばゞ、幾千ならざるに野は餓莩を以て滿たさるゝに至るべく、世界の凶事これより大なるは無し。人もし皆な生を輕しとし道を重しとし、既に一たび道を聽けば、生死何の關するところぞといふに至らんか、人類の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

衰亡忽ちにして來るべし。又天下の民を擧げて悉く其友の爲に生命を棄てしむるが如き、決して吉事なりといふべからず。是に於てか、ニーツヱが道德宗教を以て人類を墮落せしめ其活動を制肘し其存在をだに否定するものなりと目するに至る又所因なきに非ずといふべし。

されど、此くの如きは是れ人道と道德とを混同せるより來れる誤謬偏見なり。

夫れ天地の主宰神は其智慮周到にして、宇宙を活動せしむるに、總べて豫備組織を以てす。即ち、その一局部に變動と障害の起るあり、これに依りて生ずる作用を缺かんとすることあるも、直に代りて其缺けたるところを補充するに足るべき準備の、充分に備へられあること、是れ宇宙の組織たるなり。然れば、人躰の搆造の如きも、上は大腦の兩半球より、下は下肢の壹對に至るまで、總べてシムメトリーの形式を有し、兩々相對する觀ある如き、實は全く豫備組織の原理に基くものにして、その一方に故障あり其作用を逞ふする能はざる時に當り、他を以てこれに代らしめんが爲めなり。是に於てか知る、人間に壹本ならずして貳本の腕あり、壹眼ならずして兩眼ある所因は、皆なこれ危險に備ふる準備たるに過ぎざるを。もし假りに、有らゆる人間を以て壹ツ目小僧の如く作られたるものなりとせば、その唯一の眼を傷けられたる時に於て、忽ち視力を失ふに至るべきならずや。かくして、人間を無限の不便と苦痛とに陷らしめんことは、仁慈なる天地主宰神の忍ぶ能はざるところなり。而して、天地主宰神の斯の仁慈は、たゞに人類のみならずして一切衆生と有らゆる存在物とに及び、其極遂に『存在』を以て全宇宙に一貫せる大意趣と爲し、存在物存在の爲めにする周到遺憾なき準備と豫備と保護とを以て、全天地は經營せられつゝある如き觀を示すに至れり。心臟或は腦髓の如き機關の、數枚の膜に包まれ、又其膜と膜との間の、液水を以て充たさるゝが如き、皆な是れ其受くる危險を防阻せんとするに外ならざるなり。

又、暫く之を植物に就て觀ぜよ。その有するところの花粉は常に無數なり。その結ぶ種子の數、又決して少なしとせず。然れども、それ等の花粉悉く皆な種子となり、その種子悉く又發芽して完全なる草木たるに至れば、全地球上は到るところ草木繁茂し、遂に人類其他の動物が、生を保つの餘地だも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遂に之れ無きに及ばんなり。然れば、此く無數の花粉と種子との、悉く用ひらるべきものに非るや明かなり。用なくして而して此く無數の花粉と種子との、各種屬の草木に賦與せらるゝ所因のものは、他なし。是れ危險に備ふるなり。即ち若し現下の地球上に需要せらるゝ各種草木の定數に相當する種子と、又その種子數に相當する花粉とのみを其各種屬の草木にして賦與せらるゝのみならんか、一朝不時の障害起りて、其種子或は花粉の存在を危ふし、爲めに定數に欠損を生ずるが如きことあるに至らば、其種屬の草木は地球上現下の需要に應ずる能はずして、大なる不都合と不便とを生ずるに至るべし。是に於てか、實際の需要數よりも遙に多數の花粉と種子とを各草木に賦與し、以て萬一の用に備へ、尋常一樣の危害によりては、決して其草木の種屬が絕滅する如きことなからしむ。

かの春の頃に當りて、よく池中に見らるゝ蛙の卵の如き其數實に限なし。又それより孵化せらるゝオタマジャクシの如きも、甚だ夥きものあり。この蛙の卵にして悉くオタマジャクシとなり、又このオタマジャクシにして悉く蛙とならば、世界の國中は一見殆んど蛙の棲息地たるに過ぎざる觀あるべけれど、天地の主宰神は、茲に自然陶汰の妙用によりて其不必要なる過多分を絕滅するを以て、幸に蛙充滿の天地を觀ずしてやむを得るなり。しかも、その初めに當りて實際の入用以上なる過多の卵を產出せしむる所因は、花粉の過多產出と等しく、宇宙間の總てが、皆な豫備組織より成りて、滿一の欠損に備へんとするものあらんか爲めなり。之を國家の財政に就て考ふるも、經常の歲出豫算に加へて、なほ第一第二等の豫備金を準備し、一旦緩急ある時に備へ、經常豫算額の悉く支出され終りたる時に於ては、まづ第一豫備金より支出し、なほ不足あらば更に第二豫備金のうちより支出せられ得るやう、充分滿分の法を講じつゝあるにあらずや。況んや、智慮具足せる宇宙主宰神の、複雜なる大宇宙を支配せんとするに於てをや。しかも、又その大慈大悲なるものあるに於てをや。

夫れ、動物をして存在せしむる第一原因は、其動物が有する本能にあり。即ち、動物の本能は先づ動機となりて其動物を動かし、以て存在作用を經營するに至らしむ。存在に二種あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り、一は我が存在のためにする自存と、他は種族存在の爲にする種族繼續となり。而して、自存の爲めには生存競爭を營み、種屬繼承の爲めには生殖作用を營むこと、是れ即ち動物本能の意趣なり。されば、動物の第一意義は生存にして第二意義は生殖たりといふも、敢て不可なからんか。故に又、動物の本能とは、生活慾と生殖慾とを意味するものにして、殊に生活慾の其大部分を占むるものたるや、明かなり。然るに宇宙の豫備組織制度は、又動物本能の上にも行はれ、實際其動物を生存せしめ又其種屬を繼續せしむるに必要なる動力以上の本能量を總べての動物に賦與し、一朝或る危害によりて本能の一部に欠損を生ずる如き急あるも、豫め賦與せられある過多本能の入りて其足らざるところを補ひ、依然として生存し依然として生殖し、其自存と種屬の存在とを全ふするに危からざらしむ。蓋し宇宙に一貫せる一大意趣は『存在』にあればなり。

殊に、人類は宇宙の主宰神が恩寵の加はるところ豐なるを以て、その種屬を絶滅するの憂なからしめんため、特に過分の豫備本能を之に賦與し、種々なる危害の來りて其本能の一部

四

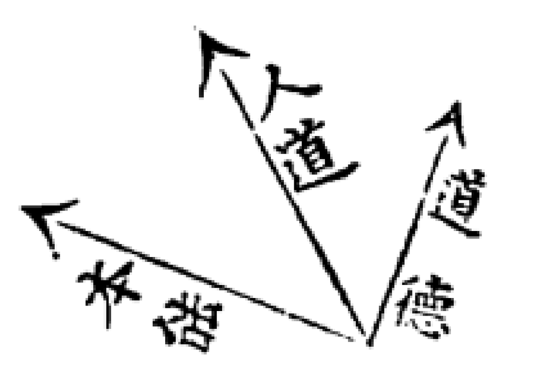
を傷くるも、容易に其生活慾と生殖慾との絶ゆるが如きことなからしむ。されば、人類天賦の本能は、悉く之を自存と種屬繼續との爲にする動力として用ひ終るべき要なく、隨て本能の要求するところ、悉く之を滿足せしめざるも、決して、人各々の自存に故障なく種屬の繼續に危害を招くが如きことある無し。加之、平時にありて共に萬一の爲めに準備せられある過多本能の要求をも容れて、生活慾と生殖慾とを肆にする如きは、却て自存と種屬の繼續とに禍を致すものなり。しかも尚ほ天賦の本能は悉く滿足せしめざるべからずといふは、是れ花粉の悉くをして種子を結び、種子の悉くをして皆な發芽せしめ皆な生長せしめざるべからずといふに同じ。又蛙を以て地球の全面を覆はざるべからずといふに同じ。其愚や知るべきのみ。然るに、世には本能滿足主義を以て人道なりと爲すの論者あり。此くの如きは、實に是れ人類に賦與せられある本能の全量を以て一に歸し、その必要量と豫備分との二つより成るを知らざる淺見に坐するものなり。

然り而して、天賦の全本能量のうちより、其豫備分を控除したゞ必要量のみを以て人類存在の動力たらしむるの道、之を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

稱して『道德』と云ふ。

されば、道德の作用たるや頗る消極的のものにして、專ら全本量能の充分なる作用を阻遏し、之を適度の分量に切りつむるにあるを以て、道德と本能とは常に全く其方向を反對にせざるべからず。然り而して、本能の期するところは先づ何よりも自己の存在即ち自存を全ふし、續ひて種屬の存在を計るにあり。是に於てか、道德は、この本能の發展せられて豫備本能の末に至るまで悉く充足せらるゝが如き弊あらんことを防かんために、自存を否定し、所謂犠牲獻身を奬勵し、身を殺して仁を爲せよと勸むるなり。又、獨身生活の淨清をも併せ說くなり。されど、此くして人類の存在を咀ひ獨身を以て人類の常態たらしめんとするは決して道德の眞意趣に非ず。たゞ、此く本能に反對せる作用を人心に及ぼして、豫備本能を控除せんとするに過ぎざるのみ。故に、人類天賦の全本能量より道德の功力によりて豫備本能量を控除せるもの、即ち是れ人道の廣さ(デイメンション)なり。故に、道德は決して人道に非ず。人道とは全然その歸趣を異にせる本能と道德との二大勢力の平均によりて生ずる兩者中間の徑路をいふ。されば又、人道とは(之を力學的に說明すれば)本能なる一分力と道德なる一分力との二分力の作用によりて生ずる一總力にして、假令へば茲に示すところの圖の如し。



道德なるものの本質素と此くの如く本能を除却せんとするにありとせば、道德の完全圓滿なる理想の『自殺』にあるや明かなり。蓋し、自殺は本能の第一義たる自存慾を棄つることなればなり。犠牲獻身と有らゆる道德とは皆な自殺の變形にして唯その度を弱めたるに過ぎざる又宜なる哉。ショウペンハウエルが自殺を以て道德の最上なるものとし、生存慾を除却すること即ち是れ道德の歸趣なりといへるは、蓋し千古の智言といふべし。然り、自殺は道德の最高理想なり。されど其れ人道に非ず。如何に道德の敎化力强しと雖ども、悉く本能を絕滅せしむる能はず、本能の力は又依然として活動す。是に於てか、道德は唯本能の一部を制し、本能は又道德の全

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

功力を抑制し、玆に兩者の平均を觀るに至る。その平均點の軌跡を稱して『人道』といふこと既に言へるが如し。今、試に人道と道德と本能との關係を比例式にて示さんか、即ち左の如くならんなり。

全本能量―豫備本能量＝人道＝本能―道德＝道德―本能

夫れ民は賴らしむべく知らしむべからず。道德の趣意とするところ、豫備の爲にせられたる過多本能を切り棄つるにあれども、此の如きは容易に一般民衆の理會し得べきところに非ず。又道德そのものゝ本體は決して奬勵すべきものに非ざれども、之を實行せんとして本能と互に讓步和協し、玆に適度の人道を作り、依りて以て人類の發達を計るに至るものなりと說く如きは、一般民衆をして道德の方向に執着する熱心を滅ぜしむる恐ありて、遂に豫定の功果を收め難き恨みなしとせじ。是に於てか、聖人上に出でゝ民を導くに當り、かゝる複雜なる秘義の道德の裏面に伏在するものたるを語らず、恰も道德を以て人道なるが如くに說き示し、これによりて一般民衆の渴仰執着を道德に集め、以て其方向に進ましめ、過多本能の控除をはからしむるなり。

故に一言にして約すれば、道德とは人道なりと稱して過多本能を除却する道をいふものなり。

ニーツェの如きは、徒に聖人の巧言に欺かれ、道德の唯人道なりと稱せられあるを覺らずして、直に之を眞の人道なりとなせるが故に、之を排斥せざるべからざるに至りたれども、もし道德の眞義を以て既に述べたる如きものにありとせば、その人類の存在を危ふするが如くに見えて、實は人類發達の爲にあるものなるが故に、毫も排斥すべき要なきのみならず、却て大に鼓吹せざるべからざるものたるに、思ひ至らんなり。今假りにニーツェの言を容れて、豫備本能の要求を却くることなく悉く全本能量の慾望するところを滿足せしめんか、その結果知るべきのみ。腹胃病はそれなり。鬪爭殺人もそれなり。腎虛もそれなり。トロイ戰爭もそれなり。是れ豈に人類の墮落に非ずや。

論じて玆に至れば、自殺最高道德論を稱道せるショウペンハウエルと、道德人類墮落論を稱道せるニーツェとの優劣高下問はずして又明かならずや。あゝニーツェは遂にショウペンハウエルが履の緒をだに解くに足らぬものなり。（有美）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○愛犬「黑」の墓前に泣く

去年の春より、偶と一疋の黑き犬、吾家に來り初めたり。革の頸輪したる、毛の色の艶やかなる、居動の恐れ氣なき、惣べて何處かの飼犬と見えたるに、容易すく吾家より去らんともせず。左りとて、之に食を與ふるに、うれしともせず。折々眞一文字に走せ去つてまた暫らくして歸り來る。而も、曾て吠ゆるとなく至つて哀れ氣に見ゆるものから、此は蓋し啞にてやあらん、畜ひし主に厭はれて棄られしか、若くは其主に取のこされしか、何れにしても可愛ゆきものだと言ひ合せ、家の子供等は先づ之に親しみ「黑」よく〳〵と呼びければ、渠も自づと其名に熟れて、大方は自らに與へられし新らしき名とこそ思ひつきけん、後には、「黑」と呼べば、直ちに尾を掉り漸やくにして、吾家のものらしくなりて、之より初めて庖廚の流しもとに來たり、いさゝか乍ら與ふるものを喜こび食ふととなれりける。

斯るうちに、いつの頃よりか、啞と思はれし渠は能く吠ゆるものとなり、夜中、家の周りに番して、ちとの怪しきものにも叫びつき、大抵一睡もせず、曉に達する樣に見えたり。而して、其の愛らしく吾等になつくとの切なる、殆んど一個の家族を增したる心地せられ、もし渠の姿見へざるときは、誰も其の行先に掛念せざるものなき程となれり。

朝起きて戶を開けば、渠の喜こび如何ばかりなりしぞ。余の敎塲に出づる時は、敎塲迄で見送り、敎塲より歸る頃は、吾を迎へ、余、室に入れば、遙かに見送りつゝ蹲くまる。余もし散步すれば、天地に奔躍する如く欣こび、前後につき廻りて離れず。余もし滊車に乘れば、氣車の走るを望みて悲しげに見送るとを常とせり。夜晩く歸れば、足をとを聞きて走せ出づ。暗黑の裡に何ものか近づきしと見れば、必らず渠なり。渠の頭を撫でて其の出迎へを謝し、戶を開ひて家に入り、扨て戶を閉ぢんとする時の如何に渠が哀れ氣なりしや。夜間、渠が吠ゆるとき、戶を開ひて呼べば、千萬軍の助けを得たるらしく、渠は喜こび狂へり。或る夜、雨降る時、余が晩く

歸りしに、渠は例の如く出て迎へたり。余は彼を置ひて室に上らんとする時、渠は獨り雨に打たれざる可らざる乎、渠は獨り屋外に立たざる可らざる乎、渠は何故に吾等と同輩たらざる乎、渠は何故其の胸中の思ひを述べ盡す能はざる乎など思ひ重ね、抑も、人と畜生との區別は何處にありやと疑問して泫然として泣きたるともありき。

此頃より、渠に對する愛情一入切になりゆき、何故にや渠の事の思ひ起されて、ふと胸せまるとあり。或日、某の婦人會にて演說する時など、又亦渠を想起して、自づと鼻つまらせたることありしが今にして之を思へば、佛者の所謂ゆる前兆にてありけん歟。

余近頃ろ久しく家に在らず。一日歸りて「黑」の見へざるに奇しみ問へば、此の二三日彼の姿失せ、ゆく所を知らずと言ふ左るにても不思議なり、よく〳〵尋ね置けと言ひのこして復出でゆきしに、悲しき哉、今日、忌はしき痛ましき知らせに接せんとは。

渠は余が家を去る數丁なる、邸の北の端の草庵のかげに死してあり。何ものにか突れけん、脇腹より肩に掛けて深き傷を負へり。苦しきまぎれに襤褸の如きものを口にくはへ、枯草の中に倒れ居たりと。

近頃ろ、何ものとも知れず邸内の數疋の犬に皆な傷負はせたり。何れも淺き深き傷まち〳〵ながら、全たく殺されたるは、吾が「黑」ばかりなり。渠、中に就て尤もの小柄なるに、吾家を去る數丁のあたり迄て、如何にして怪しきものを追ひゆきけん。渠は　其の防禦の責を盡すに於て、尤とも卒先し、尤とも苦戰せざる可らざるほどに感ぜしものありしなるべし。

余、此の報を得て、切なる感慨と、深き未了の疑問とを惹起しぬ。嗚呼、「黑」や。渠は、余が家の殿上にも昇らず、余が家の食膳にも就かず、たゞ殘肴冷飯を與へられ、畜生として遇せられ、奴僕の下の下にも入れられず。渠が余等に負ふ所ろ、幾何ありや。然るに、渠は其身命を献ずる迄に戰かふたり。盜賊は、渠に取りて何の損失にもあらざる黃金を奪はんとするもの也。怪しの男も、渠に對して危害を加へんとするものにあらず。然るに、渠は、其主人の爲に不利を釀すべしと認たむる一切のものに對して奮鬪し、遂に献牲の苦を辭せ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず。擊るゝに退かず、突るゝに去らず、死するに尙ほ對手を嚙まんとせしならん。嗚呼、渠が末期の床は枯草にして、渠が苦痛の際みには余は安眠せり。渠に最後の水一杯を與ふるともせず、渠が斷末に其頭を撫づるともせず、渠が死せんとする時に余が顏を見せもせず、渠がもだゆる最中には、たゞ冷露のみ其腹を冷やせしならん。渠は、其の際、必らず余と余の兒にして彼の友たる三兒の事を念ぜしならん。一言の辭も、一聲の叫びをも余等に聞かせて空しく死するとの如何に殘念なりしならん。渠はもと何處に生れしものぞ、如何なる因緣にて余が家に來りしものぞ、其死したる後は如何に成りゆくものぞ。學者曰く、畜生に靈魂なしと。左れど、余は渠を愛する切なるに隨つて、渠を余輩と太差なきものと思ひ起せり。而して、其の死の狀の勇士の如く、其献身の義人の如くなるを見て、いよ〳〵人と畜生との差別果して如何んと疑問せり。嗚呼、「黑」よ。なき「黑」の亡靈よ。夜な〳〵余等が爲に防禦せんとし吠え叫びたる彼の聲の生命よ。余に親しみ、なつき、もつれ、飛びつきたる生物の元氣よ。余をして念はしめ、痛ましめ、泣かしめ、今尙ほ忘るゝと能はざらしむる相對の靈物よ。汝は果して何ものにして、余に取りて如何なる因緣者ぞ。嗚呼、三世輪廻の說、決して愚ならず。人情の至眞に痛動するもの、如何んぞ虛ならん。「黑」よ、吾「黑」よ。余は多くの人間を忘るゝとも、汝は忘れず。多くの人間には棄らるゝとも、汝の友情は忘れず。汝の忠實と、汝の献牲とは吾が生命也。人間、何んぞひとり靈長ならん、畜生、何んぞいつ迄で畜生ならん。「黑」よ、「黑」よ、吾が愛する所の「黑」よ。希はくは永遠に此言を聞け。余は汝の心を讀み、汝の誠に感謝せる友人なりと。

○寂寥の夜半

到底、人は獸子なれども、獸も亦是れ神に造られたり。觀ずる時は、聖と俗と何如の差ぞ。淸きと濁れると、只だ一輪の月にひとし。やる瀨なき時は、水の流るゝに思ひ、つれなき時は、鳥の飛ぶに思ひ、暮色蒼然として、心頭やうやく暗き時月煙を拂つて上る。夜半、沈思して、背汗冷やかなる時、星辰きらめく。嗚呼、吾は孤獨の裏に立たず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

洋行途上の感

康有爲の女　康同璧女史　演說
川井運吉　口譯

私が英國に留學を致す時に當りまして、此日本を通りまして、さうして貴國に寄航することになりました。デ色々と貴國の有樣を見ますると、秩序は整然として、人民は、食に安じて居り、農業は盛んであり、工業商業も亦矢張り盛んである。實に日本の政治の美驚くべきであると云ふことを思はざるを得ないのであります。而して此く制度が能く整ひ、組織の非常に麗はしき日本國が、吾々の同文同族の國であると云ふことを思ふと、實に末頼もしく思はれるのでありまする。デ日本と吾國との關係は何千年の古に亘るのであり、しかも、文學風俗或は禮敎に至るまで共に同じてある。諺に輔車相依り唇破れて齒寒しと云ふことがあるが、支那と日本とは相互に依り、相互に扶け合つて行くと云ふことが、大に兩國の爲であると思ふのであります。

扨て此日本の政治の美なるさまを見、飜つて吾國を顧みますると、實に政は擧らないで衰弱して居る。是は敢て支那人自身が相寄つて自分の國を強うし、政治を能く整へると云ふことを希望しない譯でもないのでありますが、現在がさういふ風になつて居ると云ふことを非常に耻るのであります。デ一體支那はエライ國になるの望みはないか、或は支那人は豪い國になると云ふ望みを持つて居らぬかと云ふと、さうではない。しかし、そう見へるのは政府が惡いのであつて……政府の中に居る所の官吏に適當の人が其任に當つて居らないからさう云ふ風になるので、それが爲に我國の內亂と云ふものは始終絶えないのである。さうして尙ほ其外色々の禍に出遇つても政府は未だ眼を覺さない、眼を覺して佞臣共を追拂はないで尙その儘にして行く。これが實に歎かはしいことである。デ考へて見るのに、支那の國が若し滅びれば日本は立つて行かぬのであります。それで、日本には大隈伯と云ひ近衞公と云ひ或は犬養と云ふ樣な色々な志士才臣が雲の如くあ

つて、この支那の病を知り、どうかして助けてやらうと云ふことは考へて居られるやうでありますけれども、それを癒やす藥を投じなさらない。今支那の衰頽して居る有樣を例へて言ふと、中風疾のやうな病氣である。然し之に身躰中が悉く侵されて居ると云ふ譯ではなく唯其一部分が侵されて居るので若し此病を切去つて仕舞うならば支那は又再び健全なる國になるのであります。デ貴國の才臣學者が、此病を癒さなければならぬと云ふことを知りつゝ、病の第一の源に藥を投じないと云ふことは慨歎すべきことである。

一躰支那は二三十年前から法律を變へて良き政治を布かなければならぬことは明かなのであるけれども、その實際行はれずに居るのは、榮祿或は其他の佞臣の爲なのである。又近くは拳匪が起つて外國の公使館を破壞したり、又貴國の外務大臣をした西氏の如きは大に禍を蒙られた人である。それから又或國の使臣が殺されて仕舞ふたと云ふやうなことも、矢張り榮祿の罪である。さうして、事治まれば其罪の根源者、其張本者たる者の罪を問はずに、其時の大將を罰するのみに止めるのが我國の習慣である。それで、貴國及び外の七ケ國を欺いて——外の七箇國の欺かれて居ると云ふことは止むを得ないことである。是は文字が讀めない、或は風俗人情に通じないから欺されても宜いとしても、日本は同文の國で支那の人情にも通じて居つて欺さるべき筈のないのであるのに尙ほ欺されて居る。詰り言ふて見れば、榮祿其他の者に愚弄せられて居ると云ふことは笑ふに堪へたことである(拍手起る)中國が亡びますれば日本は立たない、中國全ふして初めて日本が全いのである。それであるから、之を扶けて、相互に依らなければならぬ。然るに其才臣……賢い人が雲の如くにあるに拘らず、さう云ふ風に愚弄せられて、さうして尙ほ恬として居ると云ふことである。知らないならば兎も角も知つて居つてさうして尙ほ愚弄せられて居ると云ふことは悲しむべきことゝ思ひます。

或人は言ふのに、支那を分割すれば日本は福建省を取る。是は日本が膨脹することで、誠に好いと思ふ人がある。ちよツと外から見ると成る程支那を分割して仕舞つて、日本が福建省を取るとすれば、一時は宜いことでありませうけれども、分割と云ふことは斯う云ふ風に考へなければならぬ。獨り日

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

本ばかりで分割することは出來ぬ。露西亞、英吉利、獨逸、佛蘭西と云ふやうに、外の國が這入つて來まして互に分割する。さうすると、今度は外の國は中國の人を兵として日本へ討つて來る。若し忍耐の强さ支那の兵士の訓練をするのに、西洋の兵式を以てしたならば、之に向つて日本は迚も堪へられるものでない。百年の謀を考へれば、支那の分割と云ふことは非常に愚かなことである。又日本の人は斯う云ふことを考へて居られるやうだ……支那は獨りで分れて仕舞ふ。彼の國は餘り大き過ぎて迚も頭を上げることが出來ない、餘り重過ぎるから分れて仕舞ふ方が宜い……斯う言ふ……。さうして、又曰く、支那は四分五裂して七ッか八ッに分れて、覇王とか何とか云ふものが出來る。さうすると日本は西洋文明を輸入して居る所の國であるから、支那に——東洋の空に割據して居る各州の盟主となることが出來る……丁度獨逸皇帝が普漏西に立ちて獨逸聯邦の覇權を握つて居るやうに、日本は東洋に覇權を握ることが出來ると思ふ人もあるやうである。併ながら、それは矢張り出來ないことである。支那で若し内亂が起つてさうして分割されると云ふ時には、外國は

默つて見て居るものでない、必ず何とか斯とか外から干渉してさうして、日本の自由に任せない。却つて自ら取つて仕舞ふと云ふことになる。さうすれば前に言ふた通り、日本は迚も其中に覇權を握ると云ふことは出來難いのである。それであるから、日本は今日學者才臣の雲の如くにある國であるによりて、大に支那を開發し、支那を扶けて、良き政治を施すことになるやう助けて行かなければならぬことになる。

此頃新聞を讀みまするのに斯う云ふことがある。英國と日本と同盟して支那を扶助けるといふことになつたので、亞細亞の爲め……東洋の爲に設けられた團躰や、協會と云ふやうなもの丶うちで、其目的を達したりと云ふて解散した團躰もあるやうであるが、それはいかぬ。英吉利と日本と同盟して支那を扶けると云ふことは、名分は非常に宜いことである。又大變な勢力であるから、之を若し榮祿其他の徒に聞かしめれば、是れならばモウ大丈夫……日本と英國とで支那を保護すると云ふから、吾々はどんなことをやつても搆はぬと云ふやうなことになり、惡い者の政を更に甚だしくする譯にもなるのでありますから、どうか斯う云ふやうな協合團躰は

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

止めないで支那を保護することを主張し、又一方には實際さう云ふ會合組織の力で支那を扶けられんことを望むのであります。

デ彼等逆臣は口には蜜を持ち腹には劍を持つて、さうして巧い工合に世界の人、外國の人を欺して居る。色々自分の黨が多いから色々のことを巧い工合に洗濯して、奇麗にして外國人に見せると云ふことをするけれども、彼等に勢力の有る間は支那は依然として舊の狀態を改められないものと思ひます實に彼等、榮祿其他の者の力は非常なるものである。…………諸外國の皇帝と云ふものさへ己れの權力を自國外に伸べることは出來ぬのである。所が彼等榮祿の徒は外國の臣下を殺すと云ふやうなこと、又之を取圍んで苦しむると云ふやうなことを盛にやる。是に於て私は彼の勢や各國皇帝に勝れりと思ふのである。さうして、彼一度刃を納めてさうして罪を外の者になすり付ければ、諸外國は大に彼を歡迎して、さうして彼の甘き言葉を聽くと云ふ次第、實に歎かはしいことであると思ひます。

支那問題や實に大きい、太平洋問題や實に大きい。日本……

……此の問題や實に大きい、世界の將來……此れも大きい問題であります。遡つて歷史を研究し、歷史から考へて見ると其國の力を強くするのには土地ばかりでは駄目です。自分の國と一方には海の上の權力を取らなければならない。今……此の太平洋と云ふものは世界の注意を惹いて居る海であります。昔は海權は地中海にあつた。海權が地中海にある間は伊太利や希臘の國は強くあつた。其海の權力が太西洋の方に移るに至つて初めて英國に權利が移つた。さうして、段々英領印度の上に海權を振るふやうになつて英國の權力と云ふものは段々世界に伸びて來た。さう云ふ工合に、太平洋と云ふものは、非常な意味を有つて居るので、外國が皆之に眼を着けて居る。我國は其海岸に沿ふて居るが、日本も又其海中に在る。是に於て獨逸は將來太平洋中の權利を握らむとして、南洋に在る種々の島を買ひ、或は膠州灣を取ると云ふやうな工合に、太平洋は非常に價値あるものになつたのであります。今それを考へて見ると、吾々は眠つて居る時ではない。大に眼を覺して、さうして將來の太平洋上の權利を此黃色人種の手に握る樣にすべき時である。即ち支那人と日本人とが之を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

握るべきものである(拍手)。

私は一女子でありますけれども、國民の責任と云ふものを持つて居る。又私の父は嘗て新政に與つて廟堂に立つたものであります。私が支那の事情又支那の衰頽して居る病源を知つて居るのは――私が斯の如きことを觀察する機會が多いためて……此病源を知つて居ることは他の人よりも勝つて居ると思つて居ります。是に於てです……諸君に申したいことは、支那の病氣は全身の病氣でなくして一部の病氣である其中風を取去りさへすれば支那は元の健全なる國になり、又上には英明なる聖天子が在まし、下には表面には現はれて居りませぬけれども最も望ある青年が澤山あるのでございます(拍手)ので、其上と下との間の惡いものを除きさへすれば支那は又健全なる國になるといふことである。第一に除くべきは[redacted]である(拍手)。是をするには、どうしても政を改めて仕舞はなければならぬのです。之を爲すのには或は非常な手段を用ゐたければならぬことになるかも知れぬのですが、兎に角諸君は皆西洋の事情にも能く通じ、世界文明と云ふことを攻究して居られるから、只支那を助ける〳〵とばかり騒がないで、其病源を探つて之に投藥せられむことを望むのであります。之を日本に望むと云ふのは、支那から來て居る所の留學生を日本では非常に慇懃と厚意を以て遇して呉れるのを見ても、日本がどうかして支那を助けたいと云ふ考があることの證據明かであるからなのです。只支那を助けるとばかりあせらずに、其病源に投藥せらるゝ樣にして頂きたいものです。之が諸君への願です。(拍手大喝采)

料理道

生間正起

○紅葉鮨

紅葉鮨とは鮭鱒の如き身の赤き魚を薄く平たく作りて大根卸しを靑酢にてあへ十分に靑く着色し右の身を盛交たるをいふ(靑酢とは野菜の葉を擂潰し酢に和したるをいふ)

○菊玉子

玉子を熱湯にて煮抜き皮を去り周圍へ縦に細かに刀痕を入れ布巾に包みて壓すれば菊花の形ちをなす之を菊玉子と稱して取肴などの配合せに用ゐるなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○時雨蛤

煮抜身に切生姜、揉鰹、山椒等を加へ溜醬油にて能く煮詰めたる剝身を酒と醬油と水と等分に調合したるものにて徐々と火にて煮詰め揉鰹、生姜の纖又は切生姜などを加へたるも佳し時雨の候に至れば蛤能く肥へ味美なるを以て之に時雨の字を冠せし所以なり

料理の事は右に示して置た丈て次回の雜誌の出でる迄に實習を試みらるゝに十分と思ふゆへこれで止めまして東京でいふ水菓子のことを少しお話しをします序に古の菓子と後世の菓子との相違を聊か御承知なき方に御話し致し置きますが古の干菓子といふは後世の干菓子とは大違であります古は松の實や栢の實や干した棗、かち栗などを干菓子と呼びて後世の干菓子の樣に用ゐたもので後世の干菓子は砂糖を以て古の干菓子を摸製しそれよりして花や葉の形ちもつくり動物の形ちを製する樣になつたのであるそれから栗や杏や梨、柿の類は木菓子と唱へ米の粉を搗ていろ〳〵の形ちを拵へまして油揚げにしたり又はあまづら即ち千歳藟といふ蔓草の莖葉の煎汁を塗りましたものを唐菓子と稱して賞味したものです後世の蒸菓子はこれに由て製したものであります徳川氏の時代迄はなかく〳〵砂糖は得難きものであつたゆへ王侯貴人と雖ども只今長屋住の小兒が喰ふて居る樣な菓子だも嘗めることは出來なんだのです唯菓子のみならず食物は後世から見れば實に粗末なもの計で口腹を養ふていた人が何んな人物かと思へば後世の人が爪の垢も舐ることのでけん學者にあらずんば忠臣孝子賢婦貞女より英雄豪傑歷史にある丈けにても數へられぬ程ある歷史に漏れてある人も多くあるが近來の人間は如何でしようう草木は肥料を用ゐて培養すれば律發な花を開き實も澤山に結びますが只今の人間は古人の如く麁食せず旨き滋養物を食ひそらや衞生になるの成らねの運動過さるの足らぬの夏には避暑や湯治に出掛け冬は暖室爐を据へ外出には外套や頸卷やのといふて大切に保護しますゆへ恐らくは古への英雄豪傑を淩駕する程の人物も多く出來て賢婦烈女忠臣孝子も多く世にあるじやろと思ひます麁食の時代すら歷史にある如く况んや人間の肥料培養十分に施し得られ且庠序の敎旺なる今日に於てをやそれはそふと枝葉に話が及んで肝腎の話が外へ往きそふになつてきましたゆへこの話は他日に讓りまして是から

水菓子のことを辯じましようが關西地方で水菓子といふたら葛饅頭の如き水に冷して用ゐる菓子を都て水菓子を唱へまして果物は只くだものと總稱してこれを宴會の肴の終に皮を剝き切りて出す時に限りて水物と稱しますが水菓子とは決して申しません東京では果物を總稱して水菓子と申しますがこれは水物に用ゐる果物と申す意味より唱へしものなれども水物に用ゐられません果物もあるゆへ平素は單にくだものと呼びました方が穩當で分り易い樣に思ひます

元祿風花見踊

誰か日本音樂を知らずして妄りに洋樂を皷吹するものぞ同人玆に和洋調和樂の興隆に念あり、之より名たゝる和曲を詳譜にものして、同好の士に頒たんとす。今ま「元祿風花見踊」の一曲を譜にして、第一卷を出版す。定價五十錢、印刷好良、表紙畫尤とも趣味あり。

樂友社出版　　女學雜誌社賣捌

雜録

舍監の四ヶ月（其四）

有美

○これは少し滑稽趣味を含んでることなんですが、又舍監生活には能く有り勝ちの經驗なのらしく……或る夜散歩から歸りて舍監室に入ると……時は十一時頃でしたらう……間も無く一人の舍生がやッて來たのです。語に『面色土の如し』といふがありますが、この語はその書生の顏色を形容するに作られたものだらうと思はれた位で、實に血の通ッてる色は少しも無い、丸で靑ざめて居るのです。

○『わたしはモウ五分間に死にます。モウ脈が絶えました。腦の血管と心臟とが破裂したんです。あまり數學を勉强したからナ―……』との言ひ分には、僕たるもの實に驚かざるを得んで……少し薄氣味わるく感じられる程なのでした。然しそんなに立派に口の利けるものが血行の停ッてる筈もあるまいと、一方には思ひめぐらしましたが、兎も角尋常の躰で無

いことは確であるから、『マア息むがよい』と。直ぐ舍監室内の當直室といふ疊の布いてあるところに、僕の夜具布團をのべて寢かすことにした。

○脈に觸れて驗ると、少し不整ではあるが、さして微弱といふほどでも無いから、心を落ちつける樣に色々慰めるけれども、仲々に承知しない。『先生！そんなに心やすめのことばかり云ふても駄目です。モウ脈は切れてます。私がチヤンと觸つて無いのですから』などゝ切りに僕の言を否定する。併し、當人に脈搏の知れぬのも無理がないので、自分の狼狽てる爲に、まるでトンチンカンのところを押さへて驗てるのだから。それに、醫者の息子で少しばかり醫術のことは聞きかぢッてるものなのだから、殊更僕の言などには信用を置かないで、色々獨で獨斷の診斷說を述べ、今にも息を引き取る樣な話をするのです。

○然し、人は妙なもので餘りソウ吹きかけられると、始めのうちは聞き流しにして居ても、遂に聞き流しに出來ず、或は眞か知らんと思ひ込むやうになる。僕も其流儀で、餘り五分間に死ぬ／＼と言ひつゞけられるので、或はソウかしらんと信じ込むやうになッて、餘程心配を催ふし……其まゝ放任ッて經過を觀る譯にも行かなくなり、まづ小使を起して校醫たる公立病院長を迎へにやる。……モウそろ／＼大騷ぎをやりだした。

○然し、『どうせモウ助からない生命だから、院長サンなんか呼びにやらないで下さい……迷惑をかけるだけで効がありませんから……』などゝ醫者を迎へるのにさへ、止めたてをする。僕は愈々心配でたまらなくなッて來た。靜に隣室の書生中で年長なのを醒して、部下の舍監二名を急に自宅へ招集にやる。そのうちに、當人は段々脚の方からモウ身躰が冷え出して來たといふのである。あゝ、この男子ひとりを殺すのかと思ふと、僕は氣が氣で無い。幸に、僕が散歩から歸ッて來たあとでよかッたものゝ、まだ僕が歸らず舍監室のからであるうちにこれがあッたら……舍監たる身は寸時も舍監室を離るべきでない……などゝも思ひ……頭の中は何が何やらわからぬ位……。

○『院長サンは、自分では行けぬから病院の宿直醫を迎へに行けといふことだ』と、小使は茫然として歸ッて來る。折返

へして、その小使は病院にやる。更に又生徒を何人となく院長の宅に向ける。仲々承諾を與へない……が……遂に與へたと歸ッて報告した書生があるので、僕も餘程力を得た氣がした。……實に變なものである。

○小使も、醒し起した生徒も、皆な出拂ッて、僕と病人とのみになッたら……今度は遺言を初めだした。『私が死んだら……ドウぞ父の墓の側に葬ッてくれる樣に賴む。……あゝ目的を達しないで死ぬのが殘念だナ——……先生たちや母などに世話になッて恩を酬ひずに死ぬのが濟まない。吳に居る兄には電報で知らしてやッてくだされたい』といふ樣な仕末なので……コウなると傍に居る僕は實に心細さ限りなしだ。して又『ア……ア……腹のところまで冷えて來た……ア……ア……ア……モウ逝くところだ』と切りに冷えを訴へるから、更にこの書生と同室のもの一同を醒し起し、彼等の身躰を病人に觸れしめて、その躰温で温まらするやうにした。

○すると、又遺言を始める。『君達……僕はモウ五分間に死ぬのだからナ——……永々世話になッてドウも難有う。あゝ……トウと僕は數學に生命を取られるんだナ』。之を聽くと附添ふて温めてる書生たちも皆な氣味惡るがッて顏を見合せるといふ仕末……そのうちに部下の舍監は二名とも驅けつけて來る……早速に先づ帳簿を調べて當人の宅へ危篤の電報を發した。

○院長はまだ見えぬが、ヤーレうれしや……病院の宿直醫たけはやッて來た。診察を終ると其醫員……實に妙なことをいふ『これは……何んでもありませむ。別に驚くことは無い……明日は學校に出られませう。たゞ餘り腦が過勞して一寸腦貧血を起したのですから』。あゝ、これで大安心とは悅んだが、丸で狐に鼻をつまゝれたやうな氣味で、實際氣ぬけがしましたッたよ。早や曉方の二時である。續ひて院長も來られたが、矢張り同じ診斷で腦貧血の輕微なものだとのことでした。その院長が未だ大學病院で宿直醫をして居られる頃、ある日のこと大學生で丁度同じ樣な……しかも更に激烈な腦貧血の爲に敎室に卒倒したものがあッて、迎へのものが來たので出かけて診たが……少し寐かして置いたら晩方には獨りてテクテク步いて歸ッた位で……今度の病人とて遲くも明後日あたりからは、平常の通りになるだらうとのことで

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

したのサ。
○ドーレで五分間に死ぬ人にしては、餘りに遺言なども元氣なものであッたと、今更らの樣に可笑しくなッて來ましたがこれまでは仲々可笑しいどころの騒ぎではなく、僕も殆んど死もの狂ひでしたよ。それに更に今一つ滑稽なのは……これまでたけでも既に充分に滑稽ですが……更に滑稽なのはてす……院長の始め出診に躊躇した所因で……院長はイクラ生徒の使者に來るものに『どんな病氣だ？』とたゞしてもたゞ『何だか解りません』とばかりいふので、これはテッキリ自殺が起ッたんであると思ひ、宿直醫に廻したものであッたとのことだッた。實に不思議なもので、滑稽の重なる時には能くも〳〵重なるものでは御座らんか。
○翌日電報に驚かされて、母と姉とがやッて來たが、まづ戸を開いて舍監室に入るや否や、直ぐに床の板に坐ッて一禮すると、何も言はずにサメ〳〵と二人とも泣き出した。到底モウ息子や弟は絕命してしまッてたものと諦めて驅け附け來られたのである。これも、取合せて又一種の滑稽であッたが、更に又僕が一滑稽を演じた。
○病狀のことは、委細說明して知らした上に、病人の寢室へ兩人を案內し、又その上にて、僕は餘程呑み込み顏に、腦貧血患者に對する大躰の手當——假令ば氷嚢のことなど（當時は二月頃で降雪中故自然の雪を用ひてたのだが）や、又牛乳藥餌などの與へ方に就き懇々クドイまでの說明を與へ兩方もかしこまッて聞いてたが、……それが一大滑稽であッたので……その病人の姉といふのは……豈に計らんや……後で院長などから聞くと、篤志看護婦にならうとて、態々その公立病院に寄宿し、三ヶ月ばかりも看護學を專門に修めた女であッたそうな。
（次號完結）

團十郎云く、古人も云へると乍ら、自分が言ふ丈の台詞を言ひ、自分が演るだけの動作をして了へば、最も是で吾が事終れりと云ふやうなるつもりにて、一向平氣な顏をして舞臺に居ながら舞臺の事を忘れ居る者ほど困るとはなし。かゝる者と同じに舞臺に在るものは、自分の役までが引立たぬ樣なとになるなり、一度塲に上らば、自分の言ふ事、演る事は終るとも、其幕の切れる迄は、飽まで氣合を失はぬ樣にするこそ、肝要なれ。（團洲百話）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治初年の志士青年

伯爵　大隈重信君　演説

諸君、今日は何か演説を致すやうにと云ふ事でございます、私は近頃大層用が多くて、今日も餘儀ない宴會へ參る約束がございましたので御斷りを致しました所既に通知を致してあるに依つて是非罷出るやうにと申すことでございます。それ故實は宴會の席を中途で辭して參つたやうなことで、別に何も演説の用意も致さずして出ましたが、唯今承りまするとなるべく維新前後に於ける事て、青年の心得になるやうな御話を致したら宜しからうと云ふ御注意でございますが、或は議論が切れ〳〵になつて、十分な案も纏まつて居りませぬ爲に、一つの演題を揭げて御話する譯に參らぬと存じます。唯私が所謂維新以前三十六年間の雜感、凡そ私の感じを起した事の一二を、青年諸君の爲に御話を致して見たいと存じます。凡そ國の盛衰存亡は、青年の將來に於ける希望、青年の將來に於ける立志如何に依つて別るゝと信ずるのであります。この明治維新と云ふ大いなる世界の歷史に大書すべき出來事が決して偶然に起つたのではないのである。諸君御承知の通りに明治維新の歷史と申すものは、恐らく世界に比類のない大いなる歷史である、斯の如き歷史は如何なる人が拵へたか、凡そ世界に大いなる出來事には一つの主人がある、偉大なる人傑が起つて、一世を動かすと云ふ如き人が現はれて居るのである。然るに明治維新に於ては偉大なる人傑が居つたのであるか、無論澤山な人傑も起りましたが、一人の力が何處に在つたかと云ふことを考へて御覽になると、決して一人の力ではない、即ち其時代の勢ひである、殊に外部の刺激である即ち外交と云ふものが遂に日本をして斯の如き驚くべき大變化を爲さしたのである、而して外部の刺激に依て直ちに立つて社會に現はれた者は如何なる人であるかと云へば、概ね青年である、先づ凡そ三十歲前後、前後と云ふよりも三十歲以下、殆んど二十五六歲と云ふ人が、其の時に直ちに立つて外部の刺激に反抗しやうと云ふ精神を起したのである、斯の如き青年が日本の革新を第一に呼はつたのである、其の時に當つて幕府及諸藩、即ち封建制度の盛んなる時て此階級制の盛んなる時に當つて、其當時の權力の有る人等から見れば、一介の書生が何事を爲すか、斯の如き事を以て國を誤るのであると云ふ爲に、多數の青年は不幸に掛つた、捕はれたり若くは甚しきに至つては其爲に生命を失ふと云ふ如き事が續々あつた、所が一と度國の有樣が外部の刺激に依つて勵まさるゝや否や中々止まないのである、段々是が殖えて來た、而して是が恐らく全國の書生の間に、殆ど電氣の流通するが如き勢ひを以て、全國の書生に是が擴がつて來た、而して是がどう云ふ聲を以て始めて現はれたかと云へば、攘夷である、攘夷と云へば今日から見れば甚だ頑冥である、言葉は餘程語弊があるが、是は外部の刺激に反抗しやうと云ふ精神である、是は獨り日本のみならず世界にて最も文明なりと稱へる所の國民も同一の思想を有つて居る、即ち外部の壓力に反抗しやうと云ふ響きである、此響きは殆ど電氣の如き力を以て、殊に全國の青年に十分に行渡つたのである、それから此次にどう云ふ方に轉じて來たかと言へば、世界の敵に反抗せんとすれば、一國の力が斯く三百に分裂して居つては迚も反抗が出來ない、茲に於て大日本國の統一と云ふ精神が直ちに考へ起されて來たのである、一國を統一せんとすれば、即ち恐れながら一國の主權者たる天皇陛下を直ちに思ひ起して來るのである、眞正の主權者は武人の爲に權力を失つて、實權は皆武門の手に歸して居るのであるに依つて、國民が外部の勢力に反抗すると云ふ念は、直ちに眞正なる國の主權者を聯想する、茲に於て始めて勤王と云ふ論が現はれて來たのである、こゝて尊王攘夷が結び付けられた所の一つのものとなつて、其呼はる聲が全國に起つたのは恐るべきものである、是は誰がやつたと云ふことなく、殆ど天の聲の如き力を以て、而して悉く青年から起つた、其事がどれだけの間に行はれたかと云へば、僅々十五六年間である、始めて日本が國を開いてから明治維新と云ふまでの間は僅かに十六七である、其間に迚も天下の大勢を封建の權力を以て押へることは出來ぬと大聲を發した、さうして前將軍德川慶喜公は大政を返上せられた、是は全く書生の呼はつた力である、德川幕府三百藩悉く是には非常に恐怖した、さうして其聲を壓へ付けやうとしたのである、維新の歷史に最も大動を立てた所の薩長と云ふ兩藩の如きも、悉くさう云ふ譯であつたかと云へば決してさうではない、攘夷とか何とか云ふ論が維新の前々年あたりまで續いて居るのである、第一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

長州に於ては元治元年には馬關に於て英、佛、亞米利加、和蘭四箇國の船に向つて砲擊したのである、之に先だつ三年前は薩摩灣に於て薩摩藩と英の艦隊と戰つた、それは即ち生麥で英人が殺した結果が遂に薩摩灣の戰爭になつた、それから既に伏見で兵を交ふると云ふ時に於ても、まだ鹿兒島の大部分は戰ひを好まなかつた、戰ひが避けやうと云ふ有樣であつた、長州に於ては既に維新の二年前には到頭內亂を起した、時の長州政府に若い書生上りの人達が反抗して、實は小さな革命を起した、高杉晉作、それから當時の元勳たる大縣大將なども多分其中の一人であつたらうと思ふ、其時分には三十にならぬ若者であつた、若氣の誤りでやつたか或は革命の已むを得ぬであつたか、是は歷史家の研究に讓るが、毛利公の政府は直ちに幕府を潰して仕舞はうと云ふ決心は無かつたやうである、それ故に內亂が起つた、馬關を根據として此烏合の若者共が長州政府を酷い目に遭はせやうとした、即ち此時に是が長州政府に向つて反抗した、負けたならば叛亂である、負けたならば國賊として縛られて仕舞ふ所であつたが、幸に叛亂が遂に成功した、所謂長州政府の革命で、其時の政府の人達は皆敗北して仕舞つて縛り上げられた、さうして若い人達の政府になつて仕舞つたのである、そこで長州政府は意を決して幕府を倒さうと云ふ決心をしたのである、是と薩摩の西鄕などが結び付いたのである、薩摩の西鄕が二大隊の兵を率いて京都にある時に、糧道を斷つて米を送らぬ、どうしても日本國の統一を圖らなければ外國に對することが出來ぬと云ふが、是には中々薩摩の多數は承知をしないのである、若し明治維新が二箇月遲れたならば、薩摩にも或は內亂が起つたかも知れぬ、所が直ちに起つた、既に大勢定まつたと云ふから鹿兒島も靜かになつた、それ故に明治維新は先づ極く平つたく言へば書生の手で出來た、一人の豪傑の手に出ずして、其時代の勢ひ即ち外部の壓力に反抗すると云ふ國民的運動が青年に依つて導かれて、實に前後稀なる歷史を生み出したのである。

凡そ斯の如き變動に於ては、必ず其變動を起す歷史の中心となる人があるのである、それなくして出たとはどうも實に不思議な譯である、是は是から將來に歷史を編纂する人達に向つては餘程必要なる材料である、其前後の材料を集めて細かに之を分拆して、且つ之を湊合して極く靜かなる公平なる腦髓を以て斷案を下したならば、維新の歷史ほど興味の有るものはないと思ふ、世界の史學に向つて大いなる利益を貢献するであらうと思ふ程の出來事である、而して斯く申す我輩は其當時の歷史中の一人であるが、私の觀察では是は全く開闢以來の帝室の御威德と總て青年の意氣と結び付いて此維新を惹起したのであらう、世界に誇るべき歷史を組立てたのであると私は斷言して憚からぬのである、そこで私は殊に信ずるのである、常に國家の元氣を惹起すのは直に青年である、吾輩既に老ひたり、如何に壯んなる意思を有つても、如何に盛んなる考を抱いても、どうしても數理上早晚諸君より早く墓原へ行かなければならぬ、早晚葬らるゝことは知れきつた話である、さうすれば將來の國民として此の國家を擔ふ者は青年を措いて何處に在る、既に世界に誇るべき歷史は青年が拵へたのである、其時の青年は今將に墓原に近寄つて居る、又既に墓原に葬られた者も餘程ある、維新前後に於て政府の上に働いた者の十中の八九は殆ど葬むられて仕舞つたのである、現に生存して居るのは僅々指を屈するだけである、其次に起るべき者はどう云ふ人があるかと云へば、餘り人は無いのである、人の無いのも或意味から言へば甚だ歎息するけれども、或意味から言へば國家の幸福である、國家の利益である、若し偉大なる人が居りて此人が國を率ゐると云ふことがあつて、而して其人が國家に忠實なる人であれば國家の幸福である、然れども若し此人が一朝誤つたならば、實に國は恐るべき不測の淵に陷るのである。

そこで英雄崇拜と云ふ事は、或場合には國を擧げて不測の淵に陷れる、英雄を崇拜する爲に國民は非常な不幸に陷ると云ふことは、諸君は歷史に於て十分御承知であらうと思ふ、斯の如き不幸なる歷史を繰返すことは好まぬのである、今日餘り豪傑が現はれないのは、或意味から言へば甚だ國の幸福である、茲に於て多數の青年の責任と云ふものが愈々重くなつて居る、英雄が起れば皆其英雄に依賴する、所が今日は英雄なくして青年が尙且つ依賴心を有つては居ないかと私は疑ふのである、是は甚だ遺憾である、青年の意氣消滅したことは最も甚しいと思ふ、此處に集つて居る諸君は決してさうではないであらうが、何百萬と云ふ青年はどう云ふ有樣であるかと云へば、甚だ今日は不幸の有樣である、先づ第一今日の時代の精神が既に恐るべき有樣である、今日の時勢が青年をして殆ど意氣消滅と云

ふ有樣に陷るゝのではないか、青年自ら陷つた譯ではないのであらうが、さう云ふ今日の現象ではないかと私は疑ふのである。

そこで先づ今日の有樣が大いなる弊害を以て論すれば、先づ教育の上に餘程弊害が起つて居ると信ずるのである、又文學美術の上にも起つて居ると思ふのである、それから宗教の上に於ては國民を擧げて殆んど無宗教と云ふ有樣である、それから風俗の上に於ては最も恐るべき弊害が現はれて居ると思ふのである、所が此風俗は是ほど恐るべきものはない、國の盛衰の別るゝ所は風俗に依るのである、此風俗の感化は恐るべきものである、所謂學校で教育を受けて學校を出る、四圍の境遇の爲に書生が墮落する、是れ皆風俗の然らしむる所である、風俗が一たび亂るゝと常識を失つて、善を善、惡を惡とする觀念が無くなる、全く無くならないとしても萎靡して來る、是ほど恐るべきものはない、甚だ此處で公然申すのも實に不快の感を起して、言ふに忍びぬ譯でありまするが、併ながら既に現はれた以上已むを得ぬ、日本の教育に取つて實に悲むべき不幸な事が成立つて居る、まだどうなるか分りませんけれどもが、既に裁判の上に視學官若くは種々の學校長、甚しきに至つては勅任官の地方官、斯う云ふ人達が既に豫審に或は公判に廻されたと云ふ事が新聞に現はれて居るやうである、是ほど悲むべき事はないのである、斯う云ふ人達はどう云ふ事をやつて居つたかと申すと、恐れながら學校で最敬禮を宣告して、教育の勅語を朗讀なし、而して常に倫理道德を說いて居つた人達である、是は殆ど常識を以て論ずることは出來ない、如何なる心理的變化を爲したかどうしても分らない、所が是は少しも怪しむに足らぬ、私は段々研究した以上之を理解したのである、それはどう云ふ事を以て之を理解したかと申すと、支那の教育と云ふものは御承知の通りに皆忠孝仁義と云ふ事を本として、それから政治は王道と云ふ事を理想として、三千年王道を說いた、殆ど三四千年王道を說き且つ仁義忠孝を說いたが、支那の四千年の歴史に於て常に王者の政は行はれなかつた、儒者の理想は少しも實現しなかつたのである、それから忠義と云ふ事を說いたが、此忠義も或場合には多少の忠臣も起りましたが、支那人の理想たる忠義は少しも實現せぬ、玆に於て支那の教育は倫理と云ふ形式、倫理と云ふ智識を與へるのみである、中々是はむづかしい、私なども昔ちよつと孔子さんの門人になつてやつて見たが、仁と云ふ一つの文字の講義でもむづかしい、殆ど終身の學問の如くやかましい、殊に莊子に至つては一層むづかしかつた、仁と云ふ文字の解剖、其文字を解釋することの智識は餘程昔より進んだのである、それ故に忠孝仁義と云ふ事の智識は支那人に非常に進んだ、併し是は形式を教へたので、事實之を行ふと云ふ事に付ては怠つたやうである、尤も明の王陽明のやうな人は知行合一と云ふやうな事を餘程呼はつたけれども、是は殆ど異端として斥けられたのである、そこで所謂倫理道德の形式を學ぶと云ふ、玆に於て日本の倫理道德を教ふる先生方も、支那人の形式を貴ぶ所の風がある、元々日本も其仲間であつて、其仲間から離れて世界と競爭しやうと云ふ勇氣を喚起すや否や、所謂明治維新の御誓文に從つて、智識を世界に求むる、萬國と幷列すると云ふのである、有らゆる世界の善を取ると云ふことであるから、支那をマルで捨てゝ仕舞つたのである、所が中々千五百年支那の教育が遺傳的に惰力が殘つて、惰力だけならば宜しいが、西洋の哲學者も心理學者も倫理學者も、いつの間にか退歩して來て支那化したではないか、そこで種々の學者達が倫理道德の形式的の智識は餘程增したが、之を實際に行ふと云ふことは支那風になつて仕舞つたのであらう、是は形式を貴ぶの弊が今日の有樣になつたのであらう、實に是は恐るべき事で、斯の如き形式のみの智識は何の爲に得るか、唯單に物識りになると云ふ話では困るのである、先づ第一自ら修むると云ふ事は惡を爲さぬと云ふのである、之を進んで社會的に言へば、社會の善を進めて過ちを成るべく少なくすると云ふ、成るたけ惡を爲すまい、それから進んで之を積極的にどうするかと云へば、所謂是は社會的に成るたけ社會の善を進め、社會の道德を進めると云ふ譯になつて行かなければならぬが、自らも怠り人には形式的に口の先ばかりで言つて居ると、此弊が遂に口を開けば忠孝仁義、若くは忠君愛國を唱へて居る先生方、又種々の倫理學などの形式を知つた先生達が、此度の如き過ち、過ちと云つて宜いが、マ少し強い言葉を以て言へば過ちではない罪惡を爲したのである、併ながら其罪惡は國家が法律を以て制裁を與へる前に、どうか德義上の制裁で自ら職を退くなどと云ふ人も一人位はあるだらうと思つて居つたが、まだ今日まで一人も自ら悔いて退くと云ふ者は無い樣子である、是は殆ど良心の痲痺であると私は斷言するのであり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ます、實に恐るべき事である。

一體人間が動物的生活を保つ、即ち生存競爭を爲す爲に隨分時々惡念が起るものである、時々ではない盛んに起るものである、所が起つてもモウ一つ良心と云ふものがあつて是は惡い事であると思ふ、一たび此良心に擯斥せらるゝと、血氣壯んなる人も惡念が勃々と起るが、それでも大抵止めるものである、少しく教育を受けて居る者はさう云ふ考が起るのである、殊に宗教家などは直ちにさう云ふ事がなくてはならぬ、其時に當つて若し惡い事をして仕舞つたならば、此處には大分基督の先生方が御いでのやうであるが、即ち今度は懺悔をすると云ふことになる、さう云ふ人が起るだらうと待つて居るが、今日まで起らぬ、まだ蓋を開けないからであるが、蓋を開けたら罪人があるかも知れぬ、政治的罪惡、教育的社會的罪惡、餘程罪人が多いやうであるが、人間が檢事から告發を受けて、何とか罪を遁れやうと思つても仕方がない、證據があるから遂に伏罪すると云ふのが多いさうであるが、まだ一つも現はれぬ、斯う云ふ有樣の事は實に慨はしいのである、是は吾輩の若い時代を誇る譯ではないが、惡い事も多かつたけれども善い事も餘程あつた、さう云ふ事が起ると腹を切る、野蠻な話であるが中々元氣が良い、罪を謝する爲に腹を切る、今日の有樣では新聞を見ると選擧の事で噓を吐いて、他の人から責められて坊主になつたと云ふ事がある、腹を切るのは野蠻な話だが昔は元氣が良い、さう云ふ元氣がある爲に社會の有らゆる罪惡を抑へ付けることが出來た、其當時の俗曲、俗曲と云ふものは誠に詰らぬものであるが、其時代の精神を能く言現はした、其當時の役人の頭を叩いて見ると、因循姑息の音がする、役人と云ふものは因循姑息である、其當時一番社會の善國家の善として、非常な熱度を以て深く信じて居つたものは何であるかと云ふと、尊王攘夷と云ふものが其當時の青年の理想として、殆ど宗教を信ずる如くに信じた、尊王攘夷と云ふ事は國民として國家に對して是ほど忠義な事はない、天皇陛下に對して是ほど忠義な事はないと凝り固つて居るから、書生の頭を叩くと尊王攘夷と云ふ響きがした、頭が響く譯ではないがさう云ふ俗曲があつた、それ故に中々書生と云ふ者がえらかつた、さう云ふやうに書生の元氣が壯んであつたから、役人も惡い事をしない、惡い事をすると書生が許さない、隨分亂暴であつた、時としては天に代つて誅する、所謂之を天誅と云ふ、是は野蠻千万で、不幸にも大分天誅に出會つて生命を失つた人がある、其人の最も不幸なのは井伊掃部頭、其當時の大政治家である、それ程の惡人ではなかつたが、此人は到頭天誅を喰つた、それから私などと同僚で、太政官に居りて國の政治をやつて尊敬すべき先輩、少しは西洋の事なども注意して居られた所の横井平四郎と云ふて、是はアナタ方も御承知だらう、横井時雄君と云ふ名高い人の御父さん、此人は私よりは年は十四五上だ、私などは三十にならなかつたから、横井と云ふ人を餘程老人のやうに思つて居つたが、今は私も其人が天誅に遭つた時の年よりも十歳も上である、其人は正直な良いおぢいさんで、太政官などで議論をすると、亂暴をやる所の吾々のやうな者の味方である、吾々のやうな亂暴者の議論も餘程能く聽いて吳れられた、其當時の參議と云ふ役で中々えらい、今日の大臣などよりも餘程えらい、元氣が良くつて三百藩を叩き倒して仕舞はう、理想通りやつて行かう、現狀を保つて行かうなどと云ふソンナ弱い根は無い、若し罷り間違つたら腹を切る、グヅ〳〵云へば刺違へるなど云ふ、中々元氣が良い、此横井平四郎君も明治二年の一月九日に天誅に遭つた、野蠻極まる話だがさう云ふ譯であつた、吾輩の左右には刺さうと云ふ者が三四人は附いて居つた、案外人間は容易に死なぬものである、英雄は死なぬなどと云ふ痩我慢があつた、度々やられたけれども生き殘つて、到頭此年まで斯うして居るのは不思議な譯である、さう云ふ元氣であつた、併ながら諸君が今時分に天誅とか腹を切るなどと云ふ野蠻な事を思ひ起すことは無論ない、諸君は皆教育を受けて居る人であるから、ソンナ馬鹿な考は無いであらうが、一體人間の氣象はそれ位でなくてはならぬ、さう云ふ氣象が消滅して來るとどうなるかと云ふと近來の言葉にハイカラーと云ふ奴がある、人間はハイカラーになつたら最期モウいかぬ、ハイカラーの者が國の青年となつたら國の運命知るべしである。

そこでさう云ふ事から起つて、今日は全く形式を貴ぶと云ふことに變じて仕舞つたのである、それで先づ從來の宗教、佛教神道の惰落腐敗、漢學が滅びて仕舞つた、近來一般行はれて居る教育は、殆ど人の精神を殺すやうな無味な事をやつて、人間を活地(いくぢ)なくする、私は園藝が好きで盆栽をやるが、盆栽の草木見たやうなものを拵へて樂む、それを拵へる先生方は人の知らぬ所で惡い事をして牢へ入ると

云ふ、斯う云ふ不思議なる有様である、此時代の有様を描く所の文學者などと云ふものは、私はそれ程敵てはない、文學は隨分國の文明の上に必要である、大切てある、併ながら今日のやうな有様であれは、文學者達がえらさうな事を言つて、時代の精神を謳ふとか、或は人情を穿つなどと云つて、多數の書生が惰落し居るのと同じやうに、此文學者これから美術家も矢張りさう云ふ譯である、美術の話をすると長くなるから止めますが、文學美術などと云ふ事は今日大切なものである、人文の發達に非常に利益の有るものである、殊に文學美術は道德と結び付き宗教と結び付き、社會と結び付いて非常に大切なものである、是が今日どうなつて居るかと云ふと、骨董屋、茶人、待合、料理屋などに應用されて、憐れ果敢ない有様である、やたらに不平家見たやうに社會を罵るやうであるが、是は私の種々雜感を言現はして訴へて見るのだ、さうして青年に元氣を附けて見やうと思ふ、此の諸君の中から大分學者も美術家も天才も飛出すかも知れぬ、政治家も宗教家も出るかも知れぬ、どうか多く出ることを望むのである、乃公でなければ此時代を救すことは出來ぬ、乃公の感化力で日本の今日の現狀を變へしてやらうと云ふ事を言ふ人の出ることを望むのである、それ故に私はおだてる譯てはない、眞實吾猩はさう云ふ時代を經過して今日生殘つて居る一人であるから、此一點に至つては威張るのである、それて心を平かにして靜に觀察して見なさい、時に何か物に觸れて感情を起して騷ぐなどと云ふことは長持をせぬ、大騷ぎをした後は消えて仕舞ふ、それ故容易に怒らぬやうにする、全體怒るなどと云ふのは勇者のする事てない、其代り一度怒つたら急に止めぬが宜い、しつこく怒つて居れ、そこて實に意思の薄弱なことは驚くべきものである、それ故に高尙なる感情は少しも發動せずして、劣等なる感情が頻りに働く、所謂國家に對する、若くは社會に對する、或は宗教に對する如き高尙なる感情が起らなければならぬ、それが容易に起つてはいかぬ、一たび起つたら決して急に止めないで、しぶとく續けて行くのであると云ふことが、餘程必要であると思ふ、

それからモウ一つ注意を致して置きたい事は、今日の總ての弊害、即ち今御話した所の弊害を湊合して見れば、殆ど是ては國を盛んにならぬ、國は衰へるのであると、斯う所謂厭世的に殆ど亡國の有様を論ずる如く聞えるだらうと思ふが、決してさうではない、是は私は警戒を與へる、全體には決してそれ程國が衰へもしない、必ず一たび斯の如き大改革を仕遂げた所の國民、或は敵と戰つて勝つたと云ふ如き國民、又有らゆる學術、有らゆる世界の善、舊來の陋習を殆ど捨てゝ、世界の善を導くと云ふ磊落なる國民は、決して衰へるものではないのである、唯今日恐るべきは私が謂ふ風俗である、此風俗は何から導かれたかと云ふと、どうしても風俗の本は家庭である、家庭の本は夫婦である、此處にも御婦人方がおいてであるが、近年中に女權論とか、婦人方の教育が盛んであるが、どうも女權は餘り感服をしないけれども、同じく人間だから人間同士の互ひ〳〵の間にさう大いなる權力の相違がある譯はない、教育の上に於ても或程度までは同一てなければならぬ、所が此東京と云ふ大都府、是がどうも物騷な都府である、一體昔は月の名所て、月の都であつた、どうも月と云ふものは明るくもあるが、畫はど明くない、月夜などは隨分物騷である、闇より增しかも知れぬが、一體東京と云ふ都府が餘り良くない、と云ふのは吾猩が昔勤王家て王政復古をやらうと云ふ時代て、江戶を惜んだことは餘程ひどい、江戶などは穢れた土地である、斯う云ふことて甚だ惜んだ、所が其惜んだ所へ天子様が御いてになつたから仕様がない、吾々も東京へ來た、そこて天子様の御威德てどうか良くしたいと思つたが、どふもさうならぬ、ならぬのはどう云ふ譯てあるかと云ふと、四方から集つた先生が皆下宿屋の生活をする、借家をする、小さな家を拵へる、こゝて婚姻をする、所て社會の標準たる先生方の生活がさう云ふ工合に變化して來て、玆に於て婚姻と云ふものがどうも正當に行はれなかつた、何處も騷動の後、戰爭の後などはさう云ふ事が往々起る、甚しきに至つては東洋には惡い格言があつて、戰さ半ばの色遊びと云ふ事がある、死生の巷に立つて居る時には、少々の道樂は許された、甚だ宜しくない言である、今一層ひどいのは英雄色を好むと云ふ事がある、是は言語同斷暴悪極である、英雄は酒を飲む、斯う云ふ方は少しは恕して免れなければならぬ是からさう云ふ事は宜しくないが、あの騷ぎの時代は少しの罪は寬大に恕して貰はなければならぬ、其當時は餘程やつたやうであるが、斯く申す吾猩も比較的に五十歩を以て百歩を笑ふやうであるが、吾猩は五十歩の組であつた、懺悔をする、そこて家と云ふものが突然さう云ふ工合て起つたものだから、どうかすると餘程

奇談がある、一家の喧嘩大騷動が至る所に起つた、最早今日はソロ〱秩序が立つて來たから、是から次第に良くなるのであらうと思ひますが、此の風俗の本は家である、家の本は夫婦である、其本が破れたから此東京と云ふ物騷な都が中心となつた、是が全國の標準となり、是から有らゆる弊害を全國に傳播して風俗が餘程惡くなる、之を矯正しなければ實に國の元氣は消滅して仕舞ふのである、國の將來は甚だ恐るべきものである、而して其大任は青年の双肩に懸つて居るのである、併ながら吾輩もまだ死ぬまでは諸君と共に力を盡さうと思ふのである、それから今一つは總て此弊害の中心が矢張り東洋流て、上の好む所下是より甚しきはなしと云ふ事がある、何でも人の上に立つ人が自ら戒めなければいかぬ、自らは亂暴をやるが他人はやつてはいかぬとか、又人もやるから自分もやると云ふのもいかぬ、そこで十分な權力を有つた者が已れを正しくして一國の風俗の上若くは行政の上、教育の上に臨んだならば、ハイカラーなどは直らに死んで仕舞ふのである、其時には風俗も改まるのである、總て百般のものがマルで面目を改むるに相違ない、教育なども一變するに相違ない、行政も一變するに相違ない、民は發達し國は富んで强くなる、さうして世界の尊敬を受くやうになる、斯うなる事を私は期して待つのである、日本國民其者は世界に於て勝れた人種である、世界に於て勝れた民族である、さうして大いなる希望を有つて居る、それが今少し病的現象の流行病に罹つて居る、或は傳染病に罹つて居る、故に早く此病氣を療治しなければならぬ、此病的現象を健康的に恢復しなければならぬ、民族其者は健全であるが、今は所謂病氣である、一たび窒扶斯が起りペストが起ると大騷ぎをして之を撲滅する、今日恐るべき病氣は全國民を襲ふたのである、之を青年の力を以て十分に打拂つて、健康體に恢復するやうに努めることが、青年の將來に於ける最も大いなる責任であると信ずるのである、諸君と共に將來の日本を祝し、吾輩老ひたりと雖も、諸君と共に力を盡したいと思ひます。（拍手喝采）

希聲大音

○藝術的墮落

美

東京を離るゝこと九閲月。歸りて一夜竹本素行を聽く。嘗ては天來の神氣を聽者の胸奥に注ぎしもの、今は自ら意氣枯喪して昔日の深玄微渺の人を動すものあるなし。悲まざらんとするも遂に得ざりき。又越えて數日竹本小豐後を聽く。素より義太夫の名手にあらざりしと雖ども、其容色の花の如きものあるを以て、世に稱せられしが、其誇りし花顔さへ、今は又衰えて活力なく、技藝は昔日の拙なるより更に拙となり、殆んど聽くに堪えず。依りて歎じて以爲らく、今の時は、是れ技藝あるものゝ藝術的墮落を遂ぐる期節なるかと。然り、一時は其名の文壇に嘖々たりしものも、今は漸く昔日の健氣なく、その所作の昔日に劣るものあるを聞くも、その驚くべき長足の進歩なりしを耳にせず。進まざれば必ず退くは進化則の通法なり。藝術の士また進まざれば必ず退く。曾て名ありし女義太夫にして、今や其藝術的墮落の絕下に達し、その行くところをだに知られざるもの甚だ多し。今の文學作者の如き、また此くなるべきかと思へば涙禁じ難し。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

結婚せざるべきや

米國　金子從下庵

この篇は米國當代の閨秀詩家エラ、ウイルコックス氏が作る所、蓋し厭世の情にかられて、愁思いたづらにやるなき女性の迷想を破らむとてなり、吾いまその大意を不規則なる國語に飜して、以て同人に示さんとするは、世間一二の事例にあやまりつゝ、甚しく結婚をいみ、さては强ひて單獨孤寂の一生をうらやまんとする女性の少なからぬを見たれば也。

一

母君云ひ賜はく、
「急ずともよ、婚姻は多くば
なやみのたねなれば」。

二

伯母の君も悲しげに、
「妻とは奴隷にことならじ」。

三

父君はいかめしく尋ね賜ひぬ、
「彼は能く富めりや否や」と

四

姉君は嘆じ賜へり、
「婚姻と共に難事ははじまらむ、」

五

死に近ける祖母君はうめきましぬ、
「乙女の頃ぞたのしかりき」と。

六

吾が友は二度嫁して、
二度寡となりぬ。妾をかへりみ
叫んで言ふ、
「嗚呼」。

七

彼等はむたり妾は一人、
なほ生涯の門出にありて

八

彼等は妾よりも年長に、
思慮あり、智識もあれば、
曰ふところ又きく價あり。

九

然り彼等は總てを知れり、
されどもされども、如何にせむ、
妾の眼郞のそれと相合はむ時。

十

戀の世界は燃えはじめつゝ、
六個の助言も消えうせて。

十一

妾に答あり、
「わが郞のみは世間多く、
見る所の男子と異れり」と、

十二

命運は妾を招げり、
愛あるところは樂園也。

十三

愛なくば人生何の價あらむ、
總てのもの兒戲に似て。

十四

人は何と云ふも可なり、
妾はわが結婚日を宣告すべき也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

越路だより

○遼西太守趙苞到官遣使迎母、道經柳城値鮮卑萬餘人入塞鈔寇、却質苞母、載以擊郡、出母示苞、苞悲號謂母曰、欲以微祿奉養、不圖爲母作禍、昔爲母子、今爲王臣、義不得顧私恩、毀忠義、惟當萬死、無以塞罪、母遙謂曰、人各有命、何得相顧以虧忠義、爾其勉之、苞即進戰破賊、其母爲賊所害苞歸葬訖、謂鄉人曰、食祿而逝難非忠也、殺母以全戰非孝也遂嘔血死、忠義の二字此の悲劇を演出す

○備曰平常身鞍を離れす髀肉皆消す今後騎せす髀裏肉生す日月如流志將至矣而功業不建是以悲耳、

悲哉　英雄

○宋文帝の子十餘人前後誅夷武帝の子廿八人同時戮に就く古より骨肉相屠るあゝ未劉氏より甚しき者あらず

虛器を護るか爲に此慘酷を極

○元魏の故事、凡立嗣子、輙先殺其母、涵母胡充華武始伯國珍之世也、初入掖庭同列以故事祝之曰、願生諸王公主、勿生太子、充華曰妾之志異諸人、奈何畏一身之死而使國家無嗣乎、及有娠、同列勸去之、充華不可、私誓曰、若幸而生男次弟當長、男生死所不憾也、既而生涵

婦女の虛榮心身を殺して克く悔へさるに至る

右の如き悽愴悲慘を極めて厭はざる所以は歷史と習慣との人間に惡例を敎へ猛獸の如き豪傑其の私慾を飾る爲の冠冕を崇拜するより生し成れるに他ならさるべし果して人間の歷史習慣が此の如き人情忍び難き事迄も敢て爲すを憚らざるの力あるとすれは今後社會の習慣崇尙か衆生濟度を以て第一義とするの好尙を確立し新時代を開基し猛獸の餘染を一掃し現時社會の一切を革新仕度希望に不堪候

去十七日東京日々新聞の記事に昨年秘露國へ出稼せる本邦人六百人は皆風土氣候の不適の爲各種傳染病に感染し其內三百人は充分醫藥を給せられずして死し殘三百人も不健康に陷りつゝ歸國の念は矢よりも急なれど如何せん旅費の給するなければ空敷故鄉の天を仰きて憂きに沈居候云々其內の六名獨逸汽船デエク、オフ、フアイヤ號にて歸國せる者の直話と申して記載せられたり

此の如き悲慘なる記事を見ても何とも思はぬ同胞之を何とかせねばならぬ又責任あるを知らぬ政府榮譽も名譽もアツタものにあらず是皆猛獸共の榮光也人間の事にはあらざるべく候（それがし）

自殺論（上）

ショウペンハウエル
常柳有美復譯

世に自殺を以て一種の罪過なりとなすものあり。是れ多くは惟一神教の篤信者に限れり。然りと雖ども新舊兩約聖書のうち、遂に之を嚴禁する一式目一律令だもあることなし。是に於てかこの種の奉教者は、勢ひ自ら新奇發明の哲理を工夫し我が自殺排擊論の根據となさゞるべからざるに至る。しかも其いふところや誠に淺薄なるを以て、徒に大聲疾呼して論理の及ばざるところを覆ひ、力て自殺行爲を罵倒せんとするに止まるのみ。其爭や實に君子に非ず。この種の論者の說くところは、自殺を以て怯懦の最も大なるものなりとなし、これに斃るゝものを捕て狂者と呼び、意味なき雜言を用ひてたゞ自殺を惡ざまに言ひくるめんとするにあり。然りと雖ども暫く思へ、人各其天壽を全ふするは必ずしも難事に非ず。さるを好んで之を棄る所因のもの、豈に輕擧ならんや。世人の自殺を目するに一種の罪過を以てするや、既にいへるが如し。殊に頑迷なる英吉利國教徒の如きは、これを以て純然たる犯罪なりとなし、爲めに正式の葬儀擧行を許るさず、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

裁判所は其遺産をさへ沒收するに至る。是に於てか、ジユウリー檢事は、この種の死者ある每に發狂の行爲に出でたるものなりと辨證するを常とす。借問す、自殺は果して犯罪なる乎。讀者乞ふ自ら之を決せよ。今假りに一人の友ありて、殺人竊盜或は暴行詐欺などの犯罪を構へしと思へ。又他に一人の友ありて、自殺を企てしを思へ。然らば、之を耳にし之を眼にせし人に、兩者何れも相等しき感想を懷かしむるや否や。前者にありては、憤激の念胸を衝て炎々たり、之を責め懲さんとすること誠に切なるべしと雖ども、後者にありては則ち然らず、寧ろ悲痛の想に驅られて、同情のうたゝ堪へ難きものあり、先づ其不德を責むるをやめて、却て勇氣の凛然たるを歎賞するにそれ至らんなり。誰か己が知人朋友親戚の、自ら好んでこの世を去れるを觀、直に之を犯罪者なりと目して蛇蝎視するものあらんや。然らば、英吉利國敎會の僧侶は何の權利によりて吾人が敬慕する人物のこの行爲を稱して、肆に之に犯罪の名を與へ、たゞ其自ら好んで世を辭せるの故に正式の葬儀を行ふを拒絕するが如きの殘酷を敢てする乎。誠に怪むべきの極ならずや。此くの如くにして自殺を排斥するは、依るべき聖經の正文あるが故に非ず、又正確なる哲理に基せるにも非るなり。吾人はかゝる輕薄なる言辭に信じて其所信を曲ぐべからず。刑法はたとへ自殺を嚴禁すべしとするも、敎會は直に之を以て自殺者を冷遇するの理由となす能はざるべし。況んや、刑法のこれを嚴禁せんとするは、頗る滑稽に類するものあるに於てをや。死をだに恐るゝことなき人には、之を懲罰するに果して如何の刑を以てせんとする乎。又法律にして若し自殺を企てたる者を罰するといふにあらばこれ實は自殺を罰するに非ずして、自殺せんとして遂に自殺する能はざりし自殺法の工夫に臻らざるものあるを責る也。又古人の多くは自殺を視ること今の君子の如くならざりしに似たり。プリニー曾ていへることあり。如何なる痛苦を忍ぶも尙ほ其生命を永らへんとするは必ずしも凡ての人の望むところに非ず。罪惡交々その身に溢るゝものも遂には死するを得、人もし煩悶苦絕止む能はざるに至るも、たゞ一死の之を解脫し得るものあるを思へは、これ限りなき慰安なり。これ「自然」の人間に與ふる最大祝福なり。しかも、隨意何れの時にありても此の慰安に入るを得るは、又まことに祝福中の祝

福なりと。此くの如くにして古代にありては、英傑賢者の自ら殺せしもの其數實に少なからずとす。アリストートルは自殺を以て國家に對する罪なりとなせしも、之を以て決して己れに對する罪なりとなさず。若し夫れストイク派の哲學者に至りては、自殺を以て高尙にして勇氣ある行爲なりとし、賞讃措かず、仲にセ子カの如き最も力めたるもの丶如し。印度人の或はガンゼス河に身を投じて鰐魚の餌食となり、或は祭禮の神輿車に其身を裂き、或は妻の身を以て夫に殉死するなど、凡て自殺を以て法敎上の勤行なりとなせり。又人生の鏡とも觀るべき劇曲に現はれたる高尙なる人物の、自殺によりて命を終りしもの實に少なからず。譬へばゲーテの「マホメツト」なるパルミヤ又シルレルの「マリヤ、スチユアート」なるモルテヰメル同じく「ワルレンスタインス、トツド」中のテルツキー伯爵夫人及又かのオセロ等の如し。されど、人はこの種の劇を觀て、彼等が一種の罪過を犯せるものなりと思ふが如きことなかるべし。借問す、ハムレツトの獨語はこれを稱して犯罪の默思なりといふを得るやと。ハムレツト以爲らく若し死にして萬事を沒了し去るを得べくんば、悅んでこれに就くべしと。されど、事明なるを得ずして、これを決するに由なかりしが如し。

かの惟一神敎なる新舊猶太敎の法敎師とこれに賛同する哲學者輩の自殺を議論するや誠に淺薄にして、その詭辯佞說は能く之を駁破するを得べし。仲にヒユームの自殺論は眞に之を痛罵し盡くして餘すところなきものなり。されど、不幸にしてこの一篇は英國信敎家の頑迷と國敎會の理非盡とに遏げられて氏が死後に至るまで遂に公刊せらるゝに至らず、たゞ僅に秘密に出版せられて高價に分與せられしのみ。されど、後この一篇と他の一篇とを合綴してバスレ府に於て公刊せらるゝに至り幸に吾人もこれを手にすること容易なるを得るに及べり。ヒユームの如く其明晰なる理性の判斷によりて古來の迷想を打破せんとする英吉利第一流の思索家をして、純然たる哲學意見をさへ其生國に於て公にするを得せしめず、始めて之を外國に於て刊行するに立ち臻らしめしは、實に是れ英吉利國民の最大恥辱なりと云はざるべからず。されど人はこれを以て英吉利國敎の鋭敏なる道德心あるを證するものなりといはんか。呵々。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

新文

◎猛志と成功

マーデンの著。成功雜誌社の譯。意志の猛雄を教訓して、善例佳言悉くしがたし。此人の著、此社の譯、毎度ながら有益なり。

◎宗教と自然美

雄渾に自然の美を感じて、高遠に宗教の信念に伴はせんもの正教青年の人に於て他に稀なる特色を見る。今の文界に露國少く、特に宗教的露國文學少し、たゞ此の一派の文に於て見る。此書小冊子と雖ども、優に其端を見めすもの歟。

◎團洲百話

松葉子、團洲の實話を記す、其人を得たり、其眞を得たり。之を通讀するに、團洲名技の發する所、今更ながら其の淵源を知る。蓋し彼が劇界の達人なる所以、此の百話中の實談によつて確知せらる。

◎過去の罪　德田秋聲作。金港堂。

お仕舞が餘りあつけなく、何んだかボンヤリする。

◎ふところ鏡　山岸荷葉作。同前。

女同士のたわいなき仲の好さ、又たわいなきより仲の惡るくなる所、又々たわいなきに苦勞する所、よく〳〵書き現はしたり。而もたゞ此の小冊子に。

◎生殖の要　山崎增造著。尙絅堂。

眞とに單純に、よくいやみなく、此の要件を記述したり。

◎英文新誌の論壇

新渡部君の論壇は英文新誌なり。其文の雄勁眞摯は言ふに及ばず、靈活機警の宗教觀、眞に稀有の品なり。

◎新　人

海老名彈正君の「新人」は彌よ出でゝ、彌よ備はれり。斬新なる教學論、今ま之を措いて何ものぞ。

◎警　世

警世の近號に出でたる津田仙氏が談（新島襄氏と福澤諭吉氏とが海舟先生に於る逸話）何んぞ興味多きや。

◎武田式學資出納通知箋

牛刀を以て鷄を割く。武田千代三郎氏の多方面にして快新なる、遂に學生出納の事にまで世話されたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○斯翁逝く

英雄の覇權を擴張する、哲人の腦力を布演する、同に是れ帝政の膨脹なり。寸を得て尺に伸び、壠を得て蜀を望むの慨、ハーバート、スペンサーに於て之を見る。人は曰く、英帝國の全領土に日沒なしと。然れ共、哲人の思想によつて光明を得るもの全世界に滿ち充ちん。一生、村舍に居て爵祿を食はず、吾の思考を以て天下を壓すると三十年、系統秩序、層々段々として遂に思想界の一帝國を組織す。知らず、此帝今また長逝して、其國幾何年月にか永續すべき。

○紅葉山人

名詮自稱。此の人の一代は眞に其の號づくる所によつて尤とも能く表彰せらる。「死なば秋、露のひぬ間ぞ、おもしろき」。此の「おもしろき」、何等の激鬪、何等の淚ぞ。

○觀劇と學生

小說が明治に入りて著しき進步を爲し、更に又その進步の方向を明治以前のそれと全く異にするものあるに至りしは、主として、讀者の種類が又明治以前のそれと異り、學生なるものが小說の摯實なる讀者たるに至りしが爲めなり。此くの如くにして、學生の讀者あるが故に、小說進步し、小說進步せるが故に、益々學生の讀者多きを致すを得たり。しかして又學生の讀者を得るに至りしこと多きは、學生のうちより起ちて小說作者となりしこと美妙紅葉の如きものありしが故にして、玆に溫き同情の作者と學生との間に交流せられしに是れ基す。されば、演劇のことの如き、其觀客を多く學生に有するに至れば、又期せずして進步するを得べきものならずや。

然るに、舊來の歌舞伎劇俳優のうちには、學生の奮つて此の仲間に入りしものなく、爲めに學生と歌舞伎劇との間には、何等の關係なかりしを以て、學生をして自らこれに感興を有せしむるに至ること誠に難かりしが、新演劇俳優のうちには中に其前身の學生たるもの少なからず、殊に川上音次郎の如

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

き其脚本を多く學生の思想と關係あるものゝうちより撰み、しかも又之を編むに今日の小説作者の手を借るゝを以て、茲に新演劇と學生との間に綿々たる同情作用を起すに至り、學生をして新演劇の花客たらしむること多きに及べり。假令ひ其新演劇なるにせよ、此く既に演劇と學生との間に一たび關渉の開かるゝものあれば、學生が今後自ら演劇全般に感興を有するものとなり。惹ひて歌舞伎劇の觀客たるに至ること、又遠きに非るべし。かくして明治の演劇は明治の小説の如く著しき進歩あるを得べきなり。この際各歌舞伎劇々場が學生觀客の爲に歡迎の道を講じ、又演劇改善に志ある有爲の學生の、奮つて歌舞伎俳優たるに至らんこと、是れ實に目下劇界の最大急務なり。然らずんば、學生は永く新演劇の觀照のみに止まりて、その下劣なる伎藝と美化せられざる似非正劇との爲に、其趣味テーストを墮落せしめらるゝに至り、國民の嗜好を向上せしむること能はざるに及ぶべし。是れ無上の痛恨事ならずや。されど、幸にして學生の入りて歌舞伎俳優となるものあり、又その觀客の多數を學生に得るに至れば團菊なしと雖ども又大に進歩改善せん哉。

○ワグ子ルと近世の思想界

近かく森鷗外が講演にかゝるゴビノォ氏『人種哲學梗概』を讀む。中に就て最も驚かされしは、人種哲學の如き音樂詩作と何の關るところなかるべしと思はるゝ思想の系統が、其原をワグ子ルに發し、ゴビノォの思索がワグ子ルに依りて益せられしこと多かりしとの一事にあり。かのニーツエが同じく其所論の發點をワグ子ルに置きし如きは言はずもがな。此くの如くにして、この兩者は是れ其人目に觸るゝに至りし顯著なるものなれども、既にゴビノォの人種哲學の如きものにして尙ほ且つワグ子ルによりて得るところ多かりしとせば、歐西の思想が近世に至りて普くワグ子ルの影響を受けしこと著るしかるべきは、押して之を知るを得べし。されば、ワグ子ルは實に歐西近代に於ける思想界の大事件なりといふも敢て不可なからんか。ワグ子ル研究の苟にすべからざる、まさに知るべきなり。近頃我が邦にありても、姉崎氏以下ワグ子ルの研究に熱中するもの漸く多からんとする、は誠に祝すべし。たゞ其近世思想界との關渉を審にするに力められんとを祈る。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

リウマチズム靈藥効驗録

◉前山口縣知事武田千代三郎氏の來書に曰く……御調劑のリウマチス特効藥早速御送り下され難有存候。早々家内に服用致させ候處、僅か二粒にて効驗相現はれ、熱も去り痛疼も消へ失せ、積年の持病一朝にして全く平癒いたし、餘り不思議にて、うそかと思はれ候位に御座候。かゝる靈藥あることを知らず、到底全治の見込なきものと諦らめ居候處、今度び偶然の事より御近づきに相成り、御蔭にて少年の宿痾を絶つを得たるは、實に何より天幸に御座候。荊妻が此病を獲候は、先年神戸在住中にて、急性リウマチスとか申して、忽然發病、約一ヶ月程大苦しみ致し、幸に醫療の効にて一時は平癒いたし候樣に見へ候處、其後慢性と相成候と見へ、年々梅雨中は申すに及ばず、其他の季節にても雨天の兩三日も續き候へば、忽まち發病するを常といたし居候處、此度御蔭樣にて根治し得たるならんと大に悅び居候。一日おきとの御指示も有之候得共、初服より中二日を隔て第二劑を服用いたさせ候。然るに其頃より効驗相現はれ、終に第三劑を用うるに及ばずして全治致候。承り及候へば、他にも御投劑にて治療致候方々多勢有之候由誠に不思議の靈藥と申すべく、かゝる靈藥を御手許に秘し置るゝは惜むべき事に御座候へば、廣く之を世に公にせられ、該病に苦しめる人々を救はれ候ては如何かと御勸め申上候。先は御禮迄如斯御座候。敬具(卅六年八月五日)

◉大日本女子大學校教授戸川殘花氏女道子君の來書に曰く……明治卅六年一月中旬より服用いたし、九粒にて全快いたし候。リウマチズムは兩三年前より手首に痛を發し困難いたし候もの故、靈藥を用いて大きに快よく相成り休藥せし處、又々再發致し再度服藥都合九粒丈け相用候處、神の如く快癒いたし候(卅六年九月七日)

◉統計集誌主筆布川孫市君の來書に云く……小生が妹眞子數年來リウマチズムを患ひ種々醫藥を試ろみ候へども、更に其効果無之、近來は殊に重症に陷ゐり、室内の步行すら困難を感じ候に付、人の勸めに從ひ、さる溫泉に入浴せん爲め參り候處、途中病勢つのり止むなく歸宅仕候。右の事情圖らず御話申上候處、貴兄には秘藏の良藥有之候趣にて、一劑頂戴早速試用せしめ候處數日にして全快、爾來再發不仕、今日尚ほ健在に候。御秘藏の良藥服用候ものは、悉皆全快せられ候趣は、かねて拜承候得共、今度愚妹に服藥せしめ、其効驗の著ぢるしき今更の樣に感服仕候。右御禮かた〳〵敬具(卅六年七月十日)

◉其他同樣の感謝狀數十數通あれども略す。

東京市神田區三崎町三丁目一番地(東京座角)
王子病院出張所
(電話番町一〇〇一)

リウマチズム靈藥

余の少時米國に留學して恩師シーレー先生の許に寄寓するや、先生の余を見る恰かも家人の如く、萬里異邦の孤客をして溫然慈母の膝下に在るが如くならしめき。後ち別を惜んで一旦歸朝し、去々年復たび西航し、吾舊師の家を訪へば、舊師夙に去つて隔世の人と爲る。余痛恨に堪へず、追慕低徊して數夜故人の室に眠り、端なくリウマチズムを病む。先生の遺子にして當年の余が同窓者親しく看護して一家秘傳の靈藥を惠まる。頓服一粒にして病忽然として療ゆ。余驚愕し其秘方を問へば、先生の遺子笑つて曰く、之れ實に先人君に遺すの紀念ならんと。悉とく其秘劑を傳授せらる。余歸朝の後、先づ故舊親戚に試むるに、皆な神効あり即ち漸次に他の傳聞するものに分與するに、百服百中、眞に靈助あるに似たり。此に於て舊友王子病院主石川光孝氏に乞ふて、配劑を托し、廣く一般世人の需に應ずることゝはなしぬ。若し之によつて救世治療の小功あらば、皆是れ恩師の賜なりと云ふべし。

明治癸卯の冬

東京巣鴨 明治女學校内　川井運吉謹識（電話番町一〇〇一番）

海内無比　月刊　**青年界**　一冊廿錢

日本　松居松葉著　**團州百話**　隨一　實價卅五錢

山岸荷葉著　小説　**婦登古呂鏡**　實價八錢

德田秋聲作　小説　**過去の罪**　實價八錢

發行所　東京日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社

新刊　**續有美臭**　青柳有美著　十二月廿日發行

近かく煙草屋を開業せる有美の氣煙更に昔日に數倍す。惡魔主義の眞味を知らんと欲せば、白銅卅五錢を投じて斯の書を購へ。但し郵税は四錢にして市川女寅閣下の題字あり。

發行所　東京本郷四丁目五番地　文明堂

社告

毎々發行日を狂はせ申譯も御座なく厚く奉拜謝候明春よりはかゝる手落無之樣精々注意可仕候扨事務上の敏捷を計る爲め今般右の所に出張所を設け候に付自今以後御寄送の新刊雜誌及書籍類は一切出張所に御宛て被下度候追て電話架設仕候

新設**出張所**　東京市神田區三崎町三丁目一番地卅二號　**女學雜誌社**

●●注意●●　御寄送の新刊雜誌書籍類は左記出張所宛の事

（明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY